

白山ふるさと文学賞

第五回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【暁烏敏部門】〈作文「母へのおもい」〉

中高校生の部 優秀賞

母へのおもい

松任高校三年

板橋 いたばし

彩華 あやか

私の家は4人家族で父、母、妹がいます。父は私達と血はつながっていませんが私達をととても大切にしてくれます。母は父がいない間ずっと女手ひとつで育ててくれました。

私と妹がまだ幼い時に両親は離婚し、母と私と妹の3人で暮らすようになりました。母は朝から夜遅くまで弱音も疲れた顔もせず、一生懸命私達のために働いていました。私は妹のお世話をしながらいつも母の帰りを待っていました。夜遅くに母は帰ってくると、いつも笑顔で「ただいま。」と言って、私より何倍も疲れて、お腹だつてすごく空いているのに自分の事よりも私達の事を一番に心配してくれました。本当はあの時、まだ起きていた私がお母のためにお風呂を沸かしたり、ご飯を作ったりしてきたのに、妹の所へ行つてすぐ寝てしまった私に一つの文句も言わず一人でやらせてしまった事を後悔しています。

私は幼い頃から吃音という言葉をうまく話せない症状もっています。その症状に気づいたのは小学校高学年の時でした。他の友達と違つて話したい言葉がでてこなく、話せても、どもつてしまい、ひどい時は皆に笑われたり、真似される事はしょっちゅうでした。私は誰にも言えず苦しんでいると、誰よりも先に私の変化に気づき、親密に私の話に耳を傾けてくれました。今まで誰にも話せなくて人とコミュニケーションをとることが嫌いだつた私を、バカにしたりもせず真剣に最後まで話を聞いてくれる母の姿に涙が止まりませんでした。私の症状を知つた母はそれから、言葉の教室に通わせてくれたり、その言葉の教室の先生には、吃音の勉強をしている先生を紹介してもらいました。母のおかげで私は吃音という症状と向き合う事ができ、同じ思いで苦しんでいる人がいることを初めて知ることができました。人とコミュニケーションをとることが嫌いで、話すことを避けてきた私に一歩歩み出す勇気をくれたのは母でした。本当に母のおかげでたくさんの人に出会えたり、自分に少しづつ自信をもてるようになりました。

昔から母は自分がどれだけ疲れていても、私達の事を一番に優先して、一番に助けてくれました。父がいない生活はいつも母が一人で支えてく

れていて、心配性な母は頻繁に連絡してきてくれたり、家から学校まで徒歩一時間の道を毎朝仕事前に送つてくれて、仕事が早く終わればすぐに迎えに来てくれたり、家に帰ると夜からの仕事までずっと側にいられて、一つ一つの小さな思いやりが、いつも私達を支えてくれていました。小さな頃は当たり前だと思つていた事は全く当たり前じゃなくて、私達のために自分の大事な時間をさいてくれていたんだと思うと、ありがとうじゃ伝えきれない以上の感謝の気持ちがあります。

私は母に一度だけ、私が産まれた時どう思つたのか聞いた事があります。その時母は、私が初めての子どもだつたからすごく嬉しかったと言つてくれました。あまり良い状態で産まれたわけではなかつたので母はすごく心配してくれていたようで、心配性なところは今も昔も変わっていないんだと嬉しく思いました。妹が産まれてからあまり私にかまつてあげられなくなりさびしい思いをさせてごめんねと、仕方のない事なのに母は謝つてくれました。その時私は、今まで私達のために汗水たらし一生懸命頑張つてくれた母に、次は私が頑張つて恩返しをしたいと思ひました。

今では、新しい父が来て、家族4人毎日平和で、毎日とても楽しくて、毎日すごく安心ができて、本当に毎日が胸いっぱいになるくらい幸せです。父は朝早くから暑い中毎日頑張つています。家族の中で一番周りをみて、子どもっぽいところもある優しい父です。一つ下の妹は毎日家の家事を頑張つてくれてます。大人しい性格だけど家では明るく、一緒にいると安心できる存在です。母は朝から夜まで、毎日遅くまで残業しながら一生懸命働いています。今では父と助け合つてとても楽しそうにしている母を見るとすごく嬉しくなります。今でも心配性なところはありますが、そんな誰よりも私達を大切に思つてくれる母が一番大好きです。小さい頃から、私を守つてくれて、私を信じてくれて、私達を大切に育ててくれた母が毎日幸せそうに、笑つていてくれる事が何よりも嬉しくて、私の一番の幸せです。これからも家族4人で仲良く笑つていきたいです。